



ピッポ新聞

2005

4

No.198

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円
編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3
TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>
Email pippo@diana.dti.ne.jp

新米古本屋の垣間

見た本の周辺事情

(その1)

インターネット古書店「ピッポ古書クラブ」を始めて、この3月で3年半が経ちました。新刊の子どもの本専門店でありながら古本の子どもの本専門店を始めた理由の一番は「まだ、子どもに手渡したい本なのに、いつの間にか品切れや絶版になっていく本がとて多い」ということでした。

本屋は、お客さんから受注した本が店に在庫がなければ、版元に発注します。注文短冊というのを取次店へファックスで送ります。版元にその本があれば2週間前後で入荷しますし、品切れや絶版の場合は注文短冊に「品切れ重版予定なし」とか、何月頃重版出来予定、あるいは「絶版」などと表示されて戻ってきます。

本屋としては、待つてくれたお客さんに「品切れだそうです」と、伝えることはつらいことです。しかし、新刊本屋の仕事はここで終わりです。現在流通していないものを、既存の流通システムからは入手できないからです。

考えてみれば、ここからが古本屋の仕事の領域になるわけです。現在流通していない本を発掘して読者に手渡す、これが古本屋の仕事の一つです。発掘などと書くとおちよつとかつこいように聞こえますが、実体はまあ、これはばくの

場合の話ですが、ネット上で他の古本屋さんを持つていないか探すか、機会あるごとに、古本屋やブックオフなどの棚、あるいは各地で開かれる古書展を見て歩くことしかできません。ですから、実際はなかなか探している本と出会うことは少ないのです。

これまでは、東京などへ出た機会には大手の書店やクレヨンハウスなどに寄って、どんな新刊がでているか見て歩くことが多かったのですが、古本屋を始めてからは、もっぱら古本屋を見て回っています。

ともかく、新刊本屋の仕事の終着点(品切れ本の場合)が、始まりになる古本屋の領域に足を踏み込んでみて、新刊本屋では、考えてもみなかった本の周辺の問題点に気付いたり、疑問を抱いたことがいくつもあります。それを今回は少しお話ししたいと思います。

意外なことに「品切れ・絶版」、このキーワードから、本の周辺事情がさまざまに浮かび上がってきます。

出版されたばかりなのに品切れ?

まずは、古本屋でなく新刊本屋のことです。「品切れ」ですと聞けば、誰だって売れてしまっただとおもいますよね。本屋のぼくも長い間そう思っていました。ところが、出たばかりの本が「品切れ」と言われることがときどきあるのです。もちろん評判が良く売れてしまった本もあるのですが、こういう場合は「重版中で、

いつ頃出来予定」と即座に返事があるものです。それに、子どもの本はいきなり売り切れるなどということはほとんどありません。

出版社によるのかもしれませんが、「品切れ」と版元が云つても、実は本はあるのです。それが証拠に、しばらく経つて再注文すると、その本は入荷してきます。しかも一刷です。

これは、たまたま出版社にはないだけで、流通過程のどこかに大半の本はまだ存在しているのです。版元が初版のすべてを配本してしまつて、手元に在庫していないことがこいつ結果をまねくのです。

常識的に考えれば、刷つた部数の何割かは手元に置いて読者の注文に応えるのが当然だと思えますがね。時間が経つてから送られてくるのは、新刊配本した本屋から返品された本を再出荷するためですね。

何故こつということが起こるのかを説明していれば、紙数がこれだけで尽きてしまいますから省略します。ただ、これには委託販売や取次店の問題、出版社の経営状態などさまざまな問題が関係しているのです。さて、これから先が今話したいことなのですが、既に予定の紙数を多く使つてしまいました。どうなることやら？

「品切れ本」はどうなるの？

最初に「品切れ」で、新刊本屋の仕事は終わりを書きましたが、多くの思考も、「品切れ」という結果のところまで停止した

ままだったようです。しかし、古本屋を始めてからは「品切れ」といふことの意味や、その先を少し考えるようになりました。

出版社によっては、「何月何日をもって品切れ(?)になります」と、ファックスで知らせてくれるところがあります。ほとんどの出版社は連絡などくれないうで、いきなり「品切れ、あるいは絶版」になることを考えれば、これは、本屋(＝読者)にはとてもありがたいし、親切な情報だといえます。

ですから、多くの方でもこの情報は、すぐに「ピッポ新聞」へ載せて読者にお知らせし、注文も取ります。

それに、古本屋を始めてからは、少しすけべ根性もでてきました。値上がりしそうな本(古本としてという意味です)は、余分に在庫して、しばらくしてからネット上で売ろうかな、などと考えたりもします。

ある時、ふと考えたら

出版社は「何月何日」と期限を切つてなくなると知らせてきたが、考えてみれば、同時にこれだけの本が(だいたい二十〜二十五点ぐらいの書名が書かれています)一斉に品切れになることなど物理的に考えられないことです。また、何月何日までに売り切れるなどという予測は不可能なはずで

では、これはどういふことを意味するのでしょうか?これから先は多くの想像でしかありません。(実際はどういふことか出

版社に聞かなければ分かりません)

「何月何日」という期限は、もしかして、この本の死への猶予期間ではないのだろうか?と考えたわけです。おそらく、この先は倉庫からはずされて、断裁されてしまうことを意味するのではないのでしょうか?

新刊の本が読者の手にわたらず、したがって、一度もページが開かれることもなく、再生紙の原料として切り刻まれてしまうのです。これは、資本の論理からすれば当然なことかもしれませんが、本好きには、とつてい納得出来ることではありません。

一方、毎日これでもか、これでもかと、新刊本は出版され続けています。バブル期よりもかえつて新刊の出版点数は現在の方が多くとも言われています。反面では出版不況と言われるように本の売り行きは低迷しています。

本屋のスペースには限りがありますから、毎日新刊が入荷した分だけ、店の在庫を返品しなければなりません。出版社はこの返品されてきた本は倉庫に受け入れなければなりません。出版社の倉庫もスペースは限られています。すぐ満杯になつてしまつてしまう。

別の倉庫を借りる?でも経費が余分に掛かります。そうです。倉庫からはみ出した本は経費を節減するために断裁するしかないのです。

言うまでもないことですが、本は紙でできています。紙はパルプから作られ、パルプは木材です。そのほとんどは外国からの

輸入にたよっています。

今や世界的に環境破壊や地球温暖化が問題になっていますが、熱帯雨林などの森林資源の乱伐が原因の一つです。世界の森林資源が、この国では浪費されているのです。

それでも出版された本が読者の手に渡って読まれているのならまだしも、読者の手に渡らずに断裁されてしまふ、これほど無駄なことはありません。これではコンビニやファーストフードが食べ物の売れ残りを捨ててしまふのと同じです。

このことを、我々は世界に向けてどう説明をすればよいのでしょうか。

もしその断裁される本が「環境問題」や「森林資源を大切に」などといったことがテーマの本であったならば、これはもう漫画の世界がブラックユーモアでしかありません。

今のように先を争うように新刊を出し続けることが、断裁される本をたくさん生み出す原因であることは明確です。わたしたちは新しい、おもしろい本をもつともっと読みたい。だが、本にする価値があるのか、という疑問を抱かざるをえない新刊も多いのも事実です。

突然ここで誤解を恐れずに言ってしまうと、作者のローリングは世界の億万著者になつたそうだが、「ハリーポッター」はあれだけたくさん部数が刷られる必要があつたのでしょうか。

ぼくは「ハリーポッター」が、ブックオフで既に百円で売られているのを見ました。でもね、古本屋の世界ではこの本は

誰も扱わない本になると思いますよ。百年ぐらい経てば別ですがね。
さて、「品切れ絶版から見えること」はまだ続きますが、次号へ。

山里の便り

佐久間雅哉

鯨のいない山村でやれること

待つてました春到来！と三十年前ならみんな喜んだものですが、今やスギ花粉の飛散状況が話題の中心になってしまいました。高下の山も元気良く黄色い粉を撒き散らしています。

そんな山の中でわたしは、よりよつて杉の枝打ちをやっているのです。幸いにも花粉症ではないのですが、今年はまた一段とすごいので、マスク、メガネをしていてもくしゃみの連続です。

なんで杉林の中にいるのかと云えば、実はここに混植されている桐の木を貰うためです。わたしは江戸系操り人形「結城座」の人形を作るのが本来の仕事でして、頭、手、足は桐の木を彫って創ります。

その桐材の在庫がつかないので、この山主さんに交渉して、売って貰う事にしたのですが、値段がただ同然なので、その分枝打ちをすることにしたのでした。

それから、もう一つ理由があります。林業の実績づくりです。というのは、わたしは人形作りと境界巡視の仕事で生計をたてているのですが、非情に厳しい状態な

のです。そこで、なんとかこれを打破しようと思つて、林業の仕事を増やすべく、森林組合や林業会社を当たってみました。しかし、林業は斜陽ですから仕事は見つかりませんでした。それで、従来の林業形態に頼ることはあきらめ、新しい林業形態を作ろうと考えたわけです。

わたしは森林インストラクターですから、自然体験活動を林業活性化に結びつけるのが役目です。自然体験活動を主催することは、林業の一部ではないかと思うのです。山主さんは、山の手入れをたくても木が売れないので費用が出せない。都会の人は森林とのふれ合いを欲している。わたしは林業をしたい。

ならば、山主さんには自然体験活動の場として適した森林を提供していただく。ただし、森林会社がやるような大がかりな手入れではなく、小面積の枝打ち、下草刈り、間伐であることを承知していただく。

わたしはその森林内で林業と山村生活をテーマにしたレクレーションプログラムを作り、森林にふれあいたい人に提供し、料金をいただく。森林にふれあいたい人は、プログラムを通じて得た知識や、技術、想いを日常生活に活かし、よりゆたかな生活をすごしていただく。

この小さな循環システムを繰り返していけば、中にはわたしのように山里に住みたいとか、林業をやりたいと思う人がでてくるかもしれません。

そして、もう一つ忘れてはいけないのは、山村に住むお年寄りに希望を持ってもらい

たいのです。

「佐久間が山に入るところなるぞ」というのを見てもらい、りかいしてもらいたいので、林業施行の実績を作りたいという言い方をしたわけです。

私が考えているネイチャースクールの拠点は下高下集落にあらたに借りた茅葺きの民家ですから、地元の人との協力なしではできないのです。

高下にはクジラはいません。ブナ林もありません。樹齢何千年という樹もありません。でも、極めてありふれた山村があるだけです。

インフォメーション

写真展 『地球を生きる子どもたち』

4月23日(土)～5月15日(日)

グランシップ 6階 展示ギャラリー

10時～18時(入場は17時半)

主催 静岡文化財団・静岡第一

テレビ

入場料 一般 800円(前売6

00円) 学生(中学

生以上) 500円(前売

300円)

本展は、十九世紀末から今日にいたる一世

紀半、世界の写真家が記録した子どもの写真260点で構成し、世界中の子どもの幸福と地球の未来を考えます。

同時開催 『世界中の子どもたちが103』の絵本原画展

4月23日(土)～4月30日(土)

開催時間は写真展と同じ

グランシップ 6階 交流ホール

(展示ギャラリー向かえ)

入場無料

『世界中の子どもたちが103』の絵本は「平和を作ろう!絵本作家たちのアクション」に賛同した103人の絵本作家によるアーカイブから生まれた絵本です。講談社刊

尚、23日午後2時から絵本作家田島征三さんのワークショップも開催されます。

詳細と申し込みはグランシップの池谷さんまで 054-203-5714

(ワークショップへの参加は申し込みが必要です。)

* 4月23日からの原画展の期間中(1週間)会場で、ピッポが絵本を販売します。

編集後記

「愛知万博」の開幕を告げるテレビニュースを見ていたら、

会場へは弁当や水(？)こちらはさだかでないが)の持参がだめだと言っていた。理由は持参の弁当だと食中毒を起こすからだいう。弁当や飲み物は会場の食堂で売っているものしか駄目だというのである。

こんな事がまかり通るのかと驚いていたら、今度は、楽天の仙台球場でも、同じ理屈で持ち込みが禁止だという。しかもこちらは、三十種をこえる弁当の実物を並べてテレビで紹介していた。いったいどうなっているのだろうか？もし本当に食中毒を恐れているのなら、その影響のおよぶ範囲は小さければ小さいほど良いはずである。どういふことかというところ、

一家族が持参した弁当で食中毒になったって、3～5人の範囲ですむが、もし、会場の食堂で食中毒が発生したら何百人、場合によっては何千人の単位で食中毒になる可能性がある。そもそも食中毒などというものはどんなに注意しようが、必ず発生するものなのだ。だったら、本気で食中毒を心配しているなら持ち込み自由にする方が、食中毒の予防になるのは明らかだ。持ち込み禁止にするのは別の理由があるからだ。それは、高いテナント料を獲っているがため、来たお客全員に高い食べ物を買わせ食べさせるためなのである。万博へ、あるいは球場へくるヤツは「高い物を買ってつけるから覚悟してこいよ」と最初から正直に言えばよいのである。テレビは「この弁当はうまそうだ」などと、お先棒を担ぐのではなく、こんな行為を批判するのが君らの仕事ではないのか。情けない!